第７４回全道高等学校演劇発表大会 in 小樽「運河きらめくオタルナイ大会」

上演番号 13 番　小樽明峰高等学校（後志支部）

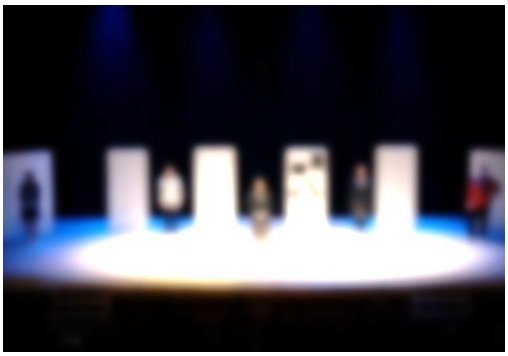
「アイマイミー」 作：杉山夏帆・小樽明峰高等学校演劇部（生徒顧問創作）

記憶喪失になってしまったマイは学校でミズキという幼馴染に会う。ミズキは記憶喪失になる前のマイに戻ってほしくて、マイの好きなものがある店に行ったり、DVD を貸そうとしたりする。周りを想う優しさを持ち合わせているが根暗で自分以外のクラスメイトに話しかけられないようなマイが好きだったからだ。だが、マイは今まで目を合わせることすらできなかった陽気でおしゃれに関心のあるサナとヒマリと仲良くなっていく。それを見たミズキは、「こんなの私が知ってるマイじゃない」と言ってしまう。そこに、自分に依存してくれていることの、無意識のうちにある優越感があるのではないかと感じられた。

実はサナとヒマリは自分を偽っていた。サナは彼氏に嫌われたくないからと相手に合わせ、ヒマリたちといる時とは違ってかわいこぶってしまう。ヒマリはお母さんが真面目で厳格なため、家の外では派手に、家の中では真面目な風に自分の容姿を変えている。だがその二人も、マイの言葉によって最後にはそれぞれの相手に隠していた自分をさらけ出すと決意していく。

舞台上のパネルには鏡がたくさん付いていた。その鏡は登場人物それぞれの「自分自身」を表しているのではないかという意見や、様々な角度から映された自分の姿を表現しているのではないかという意見もあった。この劇の一番初めのシーンでは、トイレの中にミズキと記憶喪失になる前のマイの二人がいて、そこではパネルに付いた鏡を舞台の内側に向かせていた。マイにとってトイレはすぐ駆け込んでしまう場所であり、鏡は自分を見るもの、つまり「自分を見つける」という点でマイにとっては苦しい気持ちになっている一つの表現だと受け取った。

”本当の”自分とはなにか。「その人が関わる人の数だけあるもの」「自分の心の中にあるもの」「私たちはそれぞれ偽った自分とありのままの自分があり、それらを含めて”本当の”自分」など、さまざまな意見が出た。また、”自分らしさ”とはなにか。「所詮”他人の押しつけ”であり何をしてもどう感じても自分は自分」「人によって接し方を変えていても、全部違うように見えて全部が自分」などの意見が出された。とはいえ、どれも「自分らしさ」という言葉の意味に断定的なものはなく、自分の中で感じるべきものだということに気付かされる。



この物語には、ケイという掴みどころがない一風変わった人物が登場する。自分の意思をはっきりと持ち、自分らしさを表現できるケイの性格を、４人はうらやましがる発言をしており、そこに共感したという意見も多かった。

”本当の”自分とはなにか、何をもって”自分らしさ”なのか。はっきりとした答えが分からず、誰しもが悩むことだ。「アイマイミー」は、その悩みに寄り添い背中を押してくれるような作品であった。